書評

河本のぞみ・石川　誠 著

夢にかけた男たち―ある地域リハの軌跡

二木　立（日本福祉大学）

1980年代末に彗星のように登場した石川誠医師率いる近森リハビリテーション病院（高知市）は，今や都市型リハビリテーションと地域リハビリテーションの一大メッカとなっている．本書はそれ（正確に言えば，本院，老人保健施設，訪問看護ステーション等を加えた「近森グループ」）への密着取材に基づく迫真のルポルタージュである．

石川医師自身の「自分史」とも言える長い序文に続く本文は，次の7章から構成されている．第1章「近森リハビリテーション病院」，第2章「近森のリハビリテーション看護」，等3章「近森はどう変わったか」，第4章「リハビリテーション・システム」，第5章「石川組の面々」，第6章「地域リハビリテーションの課題」，第7章「近森会から学ぶもの」．この部分の著者河本のぞみ氏は，ベテランの作業療法士兼高名なパントマイム・パフォーマーだそうである．

本書を読むと，絶えず「進化」し続けている近森グループの全体像―理念とシステム，過去と現在―が分かるだけでなく，それを支える人びとの「熱気」，「体力と熱意と使命感」がヒシヒシと伝わってくる．ただし，第6章は河本氏個人の思い入れが先行し，近森グループの地域リハビリテーションの具体像が不鮮明になっているのが残念である．

本書を読んでもっとも印象に残ることは，近森リハビリテーション病院では，「看護がリハビリテーションの中心だという認識」が徹底していることである．これは，石川医師の虎の門病院分院での体験―そこでのリハビリテーション看護を通して，「本当の看護を知った」―が原点となっている．そして，この認識をシステム化したものが，病院全体へのPPC（段階的患者看護）導入とリハビリテーション・スタッフの病棟配置である．この2つのシステムのどちらかを導入している病院は他にもあるが，両方を導入しているのはここだけであり，歴史的「実験」と言えよう．

もう一つ印象に残るのは，訪問看護ステーションに，理学療法士・作業療法士が5人も配置されていることである．訪問実績も看護婦 1.3対リハ・スタッフ 1という高さである（全国平均は42.5対1!）．この面でも，近森グループは全国のトップランナーなのである．

それにもかかわらず，病院の退院患者の自宅退院率は決して高くない（1996年で59.4%）．他の病院や老人保健施設を経て最終的に自宅退院している患者を加えても7割位とのこと（石川氏より直接聴取）．この数値は，介護保険により在宅・地域ケアを充実させれば施設ケアを減らせるという幻想への警鐘とも言えよう．

最後に，本書のタイトルへの苦言．本書では看護婦や女性ソーシャルワーカーの活躍が生き生きと語られているのに，「男たち」はないでしょう．このタイトルに惑わされず，リハビリテーションに夢をもつ多くの「女たち」にも本書が読まれることを祈る．

（四六版　頁196　定価（本体2,000円＋税）　1998　三輪書店 刊）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/05 23:10:11